『寒更霰語』と幕末期仏僧の中国語キリスト教書批判

吉田　寅

はじめに
一　『斥邪漫筆』と明末の破邪書
二　『斥邪二筆』と破邪論の発展
三　『寒更霰語』とプロテスタント伝道文書批判
結　語

はじめに

江戸時代の仏教界は、キリシタン対策としての宗門改め、寺請制度などにより、いわば特別な保護状態におかれていたといえる。しかしながら幕末期にいたると、安政の仮条約の締結以後、相次いで来日したキリスト教宣教師が、キリスト教禁制下であるにもかかわらず、さまざまな形で伝道活動を展開するにおよび、こゝにキリスト教対策を積極的に考慮せざるを得なくなった。

『寒更霰語』は、幕末期に浄土真宗の僧侶である深慨隠士（超然）が、キリスト教の論駁を目的として刊行した破邪書である。彼は一八世紀末、近江の円照寺主大濤の次男として生まれ、文化五年（一八〇八）、福堂村覚成寺の住職となったが、や

がて京都に移り、『真宗法要典拠』の校補に努力するなど、有識の学僧としての名声は高かった。[1]

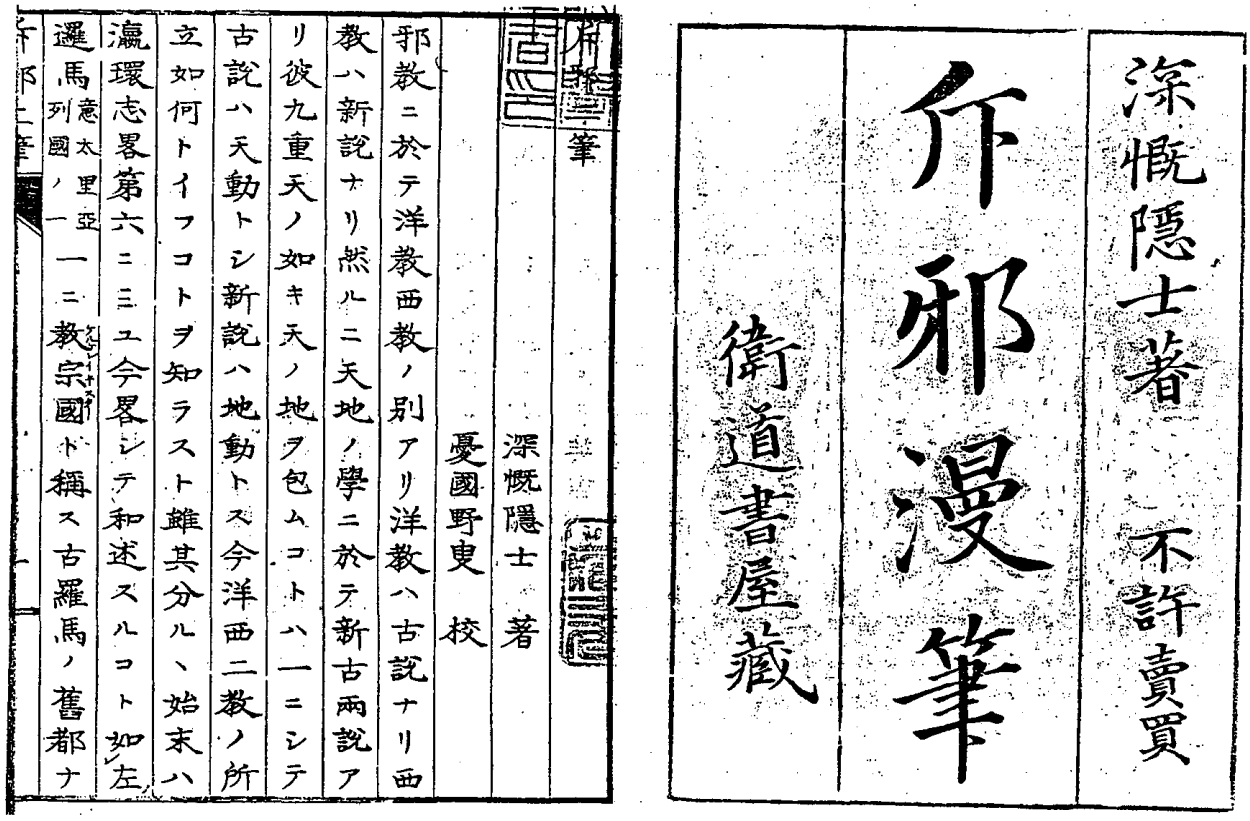
彼は幕末期におけるキリスト教の流入に対して強い危機意識を持っており、はじめ明末の破邪書の翻刻版を資料としてキリスト教批判を展開したが、やがて、幕末期にわが国に流入してきた入華プロテスタント宣教師の中国語著作等を積極的に入手し、新しい視点にたって破邪の論陣を張っている。

本稿は、深慨隠士の破邪書である『斥邪漫筆』『斥邪二筆』『寒更霰語』の内容を比較的に検討しつつ、特に『寒更霰語』を中心として、幕末期における一仏僧の破邪論の発展的展開を具体的に考察しようとするものである。[2]

一　『斥邪漫筆』と明末の破邪書

深慨隠士が慶応元年（一八六五）に刊行した『斥邪漫筆』は、水戸藩が刊行した『破邪集』（一八五五―五六刊）[3]や、杞憂道人[4]が刊行した『闢邪管見録』（一八六一刊）[5]および『翻刻闢邪集』（一八六一刊）[6]を参考文献として執筆したものである。これらの書物は、中国の明末を中心とする時期の反キリスト教的言論の代表的なものを輯成し、和刻本として刊行したものでありキリスト教に関する情報を入手することが困難であった江戸時代においては、非常に貴重な文献であった。これらの書物を活用したことについて、自序にあたる「縁起」では次のように記している。

天主教ノ書籍、旧来官禁ノ故ニ、世コゾリテ閲スルコトヲ得ズ。是以其所説ヲ詳ニスルコトナシ。只アヤシキ鏡及幻術ヲ以テ人ヲ誑ク由、口碑ニ伝ルノミ。而シテ方今西洋人ノ所談、万物ノ理ヲ窮メテ世ノ惑ヲ解キ、スベテノ技能ヲ精クスルトノミ心得テ、今時ノ耶蘇ハ昔ノ天教ニ異ナレバ世ニ害アル教トモキコエズ、サラバ邪法トモイヒガタシ、ナドイフニイタレリ。コレ夷人ノ誑言ヲ信ジテ、彼ガ為ニ遊説スルモノナリ。二百余年厳禁ノコトナレバ、近頃僅ニ互市ノ場開ケタレバトテ、豈遽ニ公然トシテ其法ヲ伝ヘ、人ノ怪ヲ引カンヤ。然ルニ安政乙卯ノ歳、水府、『破邪集』ヲ刊行アリテヨリ、


深慨隱士著　不許賣買
斥邪漫筆
衛道書屋藏

斥邪漫筆
深慨隱士　著
憂國野叟　校
邪教ニ於テ洋教西教ノ別アリ洋教ハ古説ナリ西教ハ新説ナリ然ルニ天地ノ學ニ於テ新古兩説アリ彼九重天ノ如キ天ノ地ヲ包ムコトハ一ニシテ古説ハ天動トシ新説ハ地動トス今洋西二教ノ所立如何トイフコトヲ知ラスト雖其分ル、始末ハ瀛環志畧第六ニミユ今畧シテ和述スルコト如左
邏馬（意太里亞列國ノ一）ニ教宗國ト稱ス古羅馬ノ舊都ナ

『斥邪漫筆』（青山学院資料センター架蔵）

彼教ノ人ヲ誑キ、邪路ニ入レシムル形狀心術、ソノ詳悉ヲ極ム。唐山万暦ノ末、南京会審ノ時、夷人及邪徒ノ供狀スルトコロナレバ、其伝法ノ次第、徴ヲトルニ足レリ。『破邪集』ハ、蓋当時ノ碩儒・高僧、力ヲ殫シテソノ邪ヲ弾劾スルトコロヲ蒐羅シタルモノナリ。此ニ於テ、皇国ノ人、初メテ邪教ノ旨ヲ領セリ。景山公、仏ニ佞スル人ニ非ズ、而シテコレヲ刊布ス。外侮ヲ禦グノ挙、実ニ、皇国維持ノ嘉猷ト謂フベシ。嗣イデ万延庚申ノ歳、縁山、『闢邪集』『闢邪管見録』ノ刻アリ。世イヨイヨ邪教ノ邪教タル趣ヲシリ、祖宗ノ厚沢ヲ仰ゲリ。洋毒再ビ東土ニ及バントスル時、コレラノ書、世ニ顯ハル、コト、鴆アルノ地必ズ犀アルガ如ク豈事ノ偶然ナランヤ。（下略）

（文意を明瞭にする為に、句読点を増付し、書名には『　』を加えた。なお訓点付の漢文は書き下し文に改めた。以下同じ）

右によってその一斑が分かるように、『斥邪漫筆』の主要部分は、直接にキリスト教書を閲読して論駁をおこなったのではなく、『破邪集』『闢邪管見録』などの論説を参照しつつキリスト教の問題点を指摘し、キリスト教が邪教である所以を明らかにすることに努めたものということができる。

本書の構成は、巻頭に憂国野叟の「斥邪漫筆敍」（二葉）と先憂子の「序」（二葉）があり、以下に「斥邪漫筆縁起」（三葉）と本文（三〇葉）が続いている。

本文の一例として、以下に明末のイエズス会士の活動に対し、中国の儒者や仏僧がどのように対決したかについて論述した文章の一部を引用する。

而シテ崇禎ノ代、天下ニ蔓衍シテ閩一省帰依ノ人、已ニ万数ヲ称スルニ至ル。此ニ於テ霞漳ノ布衣黄貞（天香）ナル人、一見シテ其邪ヲ知リ、故（コトサラ）ニ艾氏ニ逢ヒテ其所立ヲ質シ、其教ノ肯綮ヲ得、奮然トシテ破邪ヲ任トス。沈仲兩諸人ノ旧疏ヲ得テ上刻シ、更ニ書ヲ儒士・仏者ニ贈リテ邪教ヲ排撃センコトヲ請フ。其『破邪集』八巻、諸家ノ説ヲ輯録セリ。万暦中、利夷、『天主実義』ヲ著セシ頃、儒ニ徳園虞淳熙アリ、僧ニ雲棲ノ株宏アリ、各コレヲ評斥ス。然レドモ其比、邪教ノ書類多カラズ、雲棲マタ利夷ニ面スルコトナシ。幾程モナク寂ス。故ニ詳ナル破文ナシ。（下略）〔七―八葉〕

（〔　〕内は原典の葉数を示す。以下同じ）

以上の引用文によっても明らかなように、『斥邪漫筆』は明末より清中期ごろまでの破邪論を基礎としたキリスト教批判が中心とはなってはいるが、深慨隠士がこれとは別に、幕末期のわが国に流入した入華プロテスタント宣教師の中国語著作にも論及していることは注目すべきである。

本文の一部を引用するに、

頃偶々咸豊六年丙辰（皇安政三年）、上海新刻ノ『小学正宗』ヲ閲スルニ、専ラ儒典ヲ牽合シテ邪説ヲ荘飾シ、従前ノ外難ヲ強会ス。其餘『耶蘇教要旨』、『真理易知』等アリ。凡ノ邪教ヲ攻メント欲セバ、往昔、利・艾等ノ説ヲ窮メテ其巣穴ヲ得ベシ。後来矯飾変幻ノ岐路ヲ争フテ、方向ヲ失フベカラズ。〔一二葉〕

とあって、深慨隠士がコボルド Cobbold, Robert Henry（哥伯播義）[7]の『小学正宗』[8]やマッカーティー McCartee, Divie Bethune（麦嘉締培端）[9]の『耶蘇教要旨』[10]『真理易知』[11]等を閲読したことを示しているが、結論的にはまずリッチ Ricci, Matteo

（利瑪竇）[12]やアレニ Aleni, Julio（艾儒略）[13]等明代の入華カトリック宣教師のキリスト教論をまず検討すべきであることを述べている。

とはいっても彼が入華プロテスタント宣教師の言動や中国語著作に関心を持っていたことについては、本文の次の文章にも示されている。

近時、夷人、支那ニ留ルモノ若干、慕維廉・艾約瑟等、有名ノ者アリ。且国語ヲ以テ経史諸書ヲ訳スルヲ以テ、愈々其説ヲ荘飾シ、力メテ邪説ヲ主張スト雖、全ク本説ヲ換ルコトアタハズ。後学、隻眼ヲ開テ大観スベシ。〔二九葉〕

右の文中では、『地理全志』[14]や『大英国志』[15]の著者として有名なミュアーヘッド Muirhead, William（慕維廉）[16]や、『釈教正謬』[17]で仏教を論駁したエドキンス Edkins, Joseph（艾約瑟廸謹）[18]の活動についても言及しており、深慨隠士のキリスト教批判は、『斥邪漫筆』において、既に入華プロテスタント宣教師の中国語著作にも及んでいたことが知られる。

二　『斥邪二筆』と破邪論の発展

『斥邪二筆』は『斥邪漫筆』の続編として慶応二年（一八六六）刊行されたものであるが、深慨隠士のキリスト教研究の漸進的な成果ともいうべき内容が含まれており、前著とは内容をかなり異にしている。本書には序はなく、本文は二三葉より成り、末尾には慶応二年一二月記の跋文がある。

本書において注目すべきことは、清の徐継畬[19]が刊行した世界地理書である『瀛環志略』[20]を参照し、冒頭においてまずカトリックとプロテスタントの区別を明らかにしていることである。やゝ長文ではあるが以下に引用する。

邪教ニ於テ洋教・西教ノ別アリ。洋教ハ古説ナリ。西教ハ新説ナリ。然ルニ天地ノ学ニ於テ新古両説アリ。彼九重天ノ如キ、天ノ地ヲ包ムコトハ一ニシテ、古説ハ天動トシ、新説は地動トス。今洋西二教ノ所立如何トイフコトヲ知ラズト雖、

其分ルル始末ハ『瀛環志略』第六ニミユ。今略シテ和述スルコト左ノ如シ。

羅馬（ローマ）、一ニ教宗国ト称ス。古羅馬ノ旧都ナリ。全盛ノ時ハ西洋第一ノ都会ナリシニ、劉宋ノ時ニ至テ北狄峩特族ノ為ニ拠ラレテ、民夷族ニ変ズ。洋教ハ東漢ノ時ヨリ西土ニ伝播ス。羅馬人、崇信尤モ篤シ。故国已ニ狄ノ據ル所ト為リ、洋教ノ徒、機ニ乗ジテ招請シ、大権、其手ニ帰ス。仏郎西、峩特族ヲ滅シ、遂ニ其地ヲ以テ洋教師ニ帰シ、号シテ教王【ローマ教皇】トイフ。教王歿スレバ各教主ノ中、一人ヲ推シテ位ヲ嗣ガシム。其教各国ニ伝布ン。遵ハザル者アレバ兵ヲ搆ヘテコレヲ夷滅シ、或ハ其民ヲシテ主ニ叛カシム。仏郎西（フランス）ノ覇ヲ創（ハジム）ルヤ、教王、コレガ加冕（エボシ親）タリ。……其ノ権、此ノ如シ。明ニ至リテ、日耳曼人【ドイツ人】路得【ルター】、別ニ西教ヲ立テ、称シテ正教トス。洋教ヲ斥シテ異端邪説トス。此ニ於テ、諸国ノ半、西教ニ帰シ、教王ノ権、頓ニ衰フ。……又別ニ希臘教ナル者アリ。亦洋教ノ別派ナリ。……両教ト教規又同ジカラズ。近比泰西ノ人、洋教ヲ称シテ公教トシ、路得等ノ教ヲ修教トス。徐松龕評シテ、教ヲ立ルハ救世ノ為ナリ、而シテ分教ノ故ニ残殺已マズ、教祖知ルコトアラバ、コレヲ何トカイハントイヘリ。〔一一二葉〕

（【　】内は筆者による註記を示す。以下同じ）

深慨隠士は洋教徒（カトリック）と西教徒（プロテスタント）だけではなく、ギリシア正教徒についても、成立の歴史的背景および特色について簡明に解説することを心がけており、また引用文の末尾にみられるように、西洋では宗教戦争が度々起っていることについても触れている。

先述のごとく『斥邪二筆』の内容は、基本的には『斥邪漫筆』を継承したものではあるが、著者のキリスト教研究の深化に対応し、破邪論の論旨はより鋭いものなっている。以下に、明末のカトリックが、儒教や仏教の学説を盗用したとする論旨の一部を引用する。なおこゝではカトリック教徒に「天教ノ徒」の称を用いている。

天教ノ徒、儒仏二道ニ於テ、便宜ノ処ハ掠メテ己ガ有トシ、不便宜ノ処ハ、口ヲ極メテコレヲ詆ル。儒書ニ三皇ハ化ヲ用ヒ、五帝ハ教ヲ用ルヲ以テ、其妖妄ノ術ヲ偽リ教化皇トス。是教化ハ儒ヨリ神ナリトシ、皇ハ帝ヨリマサレリトスルナ

リ。此ノ如ク三皇五帝ノ功徳ヲ剽竊シテ耶蘇ノ名トセリ。凡『六経』ノ中、天トイヒ上帝トイフ処ヲバ頻ニ引イテ証トシ、『易』中ニ於テ太極両儀ヲ生ジ、及範囲彌綸、或ハ『中庸』参配ノ微言、皆斥シテ不当トス。此天主万物ヲ生ズル説ニ礙ルガ故ナリ。又彼輩、毎ニ仏ヲ斥ケテ魔鬼トシ、其ノ剏ムル所ノ天主ノ義ハ却テ全ク仏を竊ム。仏典ニ無始無終充満法界不可思議トイフ、盡ク竊テ天主ニ帰ス。又仏兜率天ヨリ西域ニ降生スルヲ以テ、遂ニ詭テ天主亦、天ヨリ西洋ニ降生スルトイフ。……又彼謂フ、孔子、西方ニ大聖人アリトイフハ耶蘇ヲ指ス、而ルヲ仏氏、コレヲ竊ムト。……明末、利・艾ノ輩、支那ニ入テ経史ヲ学習シ、邪説ヲ荘飾セシヨリ以来、西洋諸夷、各漢籍ヲ伝訳シ、取捨褒貶至ラザル所ナシ。〔六一七葉〕

深慨隠士が入華プロテスタント宣教師の中国語著作や諸活動についても重大な関心を持ち、その調査研究の一部が『斥邪漫筆』に掲載されていることについては前述したが、『斥邪二筆』ではマラッカやシンガポールにおける教育伝道や、英華辞書の編集などの諸活動について、次のように記している。

近時西洋諸国、頻ニ漢典ヲ訳シ漢文ヲ学ブ。米夷、堅夏書院ヲ新嘉坡ニ建テ、英夷、英華書院ヲ麻六岬ニ建テ、愛華堂ヲ香港ニ建ツ。皆漢文ヲ学ブガ為ナリ。而シテ説耶馬尼人（ゼルマニア）、『詩経』ヲ訳シ、普魯社人（プロイセン）、『四書』ヲ訳シ、英人、『康熙字典』ヲ訳スルコト、『籌夷編』ニミユ。是ヲ以テ近時ノ儒士、概ネ彼ヲ以テ駸駸トシテ嚮往ノ意アリトシ、是周孔ノ道、漸ク西夷ニ及ブ兆ナリト謂ヘリ。コレ正ク彼ガ術中ニ陥リ、媚ト竊トニ魅セラルル所ナリ。彼ガ儒教ヲ学ビテ変幻スルハ、明末以来ノコトニテ、所謂嚮往ニアラズ。其ノ学、倫理ヲ乱リ綱常ヲ滅ス。直是周孔ノ道ヲ漢土ニシテ破裂スル者ナリ。書院ヲ建テ漢籍ヲ訳スルハ、支那人ニ媚スルモノニシテ、且其道ヲ荘飾センガ為ノミ。豈周孔ノ道、四夷ニ及ブトイハンヤ。（下略）〔一三葉〕

次に注目すべきは、開国後来日したプロテスタント宣教師が、彼等の伝道しているキリスト教は、江戸時代の初期に厳禁となったキリシタンとは別派のキリスト教であって邪教ではないことを主張し、また近代科学や医学の導入等を手段として伝道

を推進していたことに対する論駁である。このことについては第一節に掲げた『斥邪漫筆』の「縁起」でも触れているが、『斥邪二筆』では更に具体的に次のように述べている。

皇国ノ昔、蠢蠢ノ民、術ト利トニ誘ハレテ其教ニ入ル。今日ノ民庶、祖宗ノ厲禁肺腑ニ銘ジテ、概ネ耶蘇ハ是邪教ナルコトヲ信ズ。読書ノ人、却テ其所好ニ阿テ、彼ガ誑惑ニ酔ヒ、天教ノ邪正ヲ商量スルニ至ル。慶元以来ノ禁ニ由ッテ、教門ノ書、破邪ノ典ヲ、併セテ公行セズ。故ニ其詳ヲシラズ、却テ矯飾ノ言ヲ信ジテ、今時ノ耶蘇教ハ昔日ニ異ナリ幻術ヲ以テ奇怪ヲ行フコトナク、唯万物ノ理ヲ窮メ世ノ惑ヲ解キ、善事医方ヲ説イテ人ヲ誘フ。豈世教ニ害アランヤトイフニ至ル。夫皇国近時僅ニ互市ノ場ヲ開ク。豈遽ニ公然トシテ邪教ヲ行ハンヤ。故ニ矯(イツハリ)テ、今ノ教門ハ古ノ教ニ異ナリト称シテ、専ラ窮理ヲ説キ医術ヲ行フ。是邪教ノ前茅(サキダチ)ニシテ、誑誘ノ香餌ナリ。固ヨリ邪教ヲ行フニ初ヨリ其教門ヲ叙セズ。漸ク説テ儒仏二道ヲ排斥シ、而後本教ヲ説キ、聞者ソレヲ信ジテ門ニ入ラント請フニ及ビテ、終ニ聖水聖油ノ式ヲ行フ。所謂洗礼ナリ。耶蘇ノ教、豈古今ノ異アランヤ。(下略)〔一五―一六葉〕

幕末期の耶蘇教は、キリシタンとは異なるものであることを宣伝し、さまざまな手段によって日本伝道の推進を計っていたプロテスタント宣教師に対し、深慨隠士の警戒感は急速に高まっていったのである。

三　『寒更霰語』とプロテスタント伝道文書批判

深慨隠士は『斥邪漫筆』『斥邪二筆』において、明末破邪論の学説を祖述すると同時に、プロテスタントに対する警戒感を表明しているが、開国後におけるプロテスタントの活動は次第に積極性を増大していた。

たとえば来日したプロテスタント宣教師は、入華プロテスタント宣教師の中国語著作を盛んに輸入したが、この背景には、中国と日本が同じ漢字を使用し、また日本の知識人階級が漢文を読み慣れているという認識があった。しかも幕末より明治初

年にかけては、日本語による布教書の出版は、日本の国内においては殆ど不可能であった事情を考えれば、入華宣教師の中国語著作の効用はなおさらに大きかったのである。

慶応三年（一八六七）、富樫黙恵[21]が執筆した『内外二憂録』[22]の一部を引用するに、

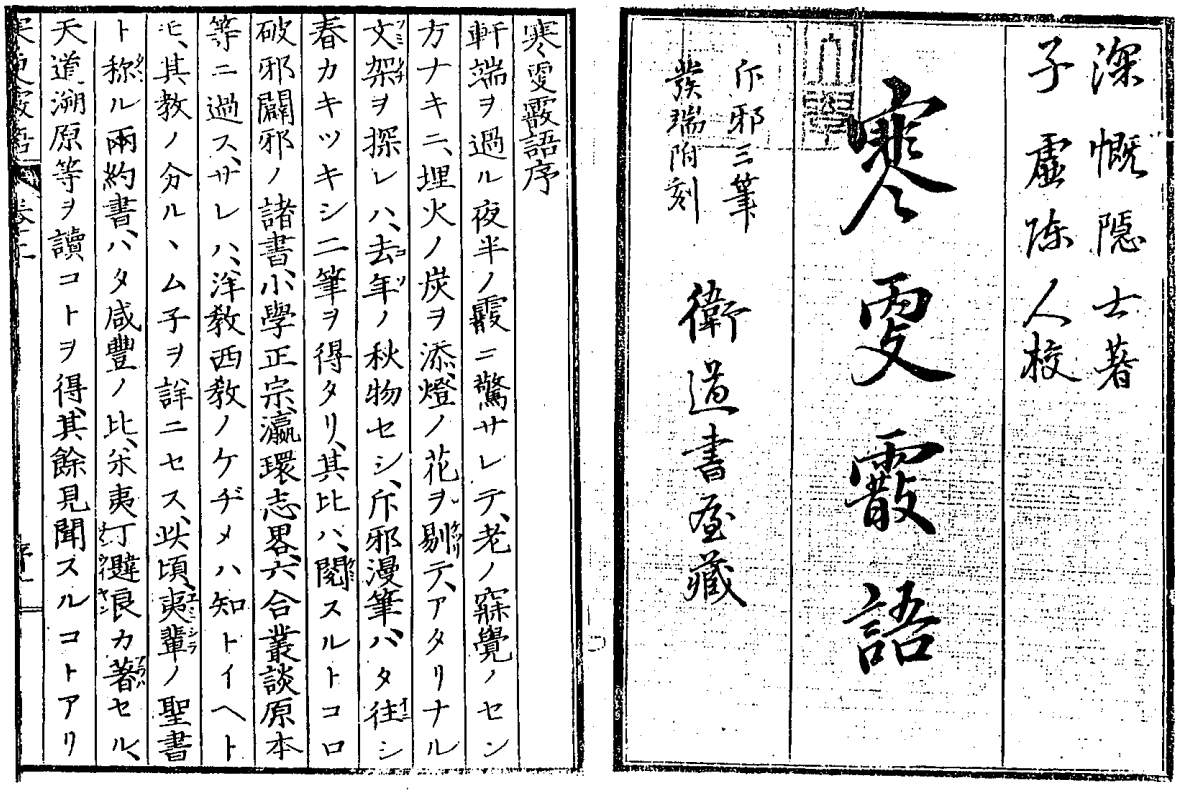
当時両三年ノ間ニ著述シタル耶蘇教ノ書類、余眼晴ニ触レタルモノスラ、百部ニ向（ナンナン）トス。此クノ如キ邪教、滔々ト天下ニ流行スルコト、誰レカ悲マザランヤ。二百余年ノ厳禁モ、時勢トハ云ヒナガラ、スデニ廃弛スルコトハ、国家ノ危厄コ、ニアラン。[23]

とあり、黙恵が百部近くの中国語著作を見たことを示している。幕末期においてカトリックはそれ程多くの著作を刊行していないことから考えて、これらの中国語著作は来日プロテスタント宣教師が積極的に取り寄せていた入華プロテスタント宣教師の中国語著作であったと考えられる。

深慨隠士が『斥邪三筆』の執筆を決意したのはこのような情況に対応してのことであるが、しかしカトリックとプロテスタントの区別もまだ完全には把握できていなかったことからいって、刊行にいたるまでには、資料・情報収集および調査・研究の為に、かなりの準備期間が必要であった。

深慨隠士が『斥邪三筆』執筆の前段階として、まず『寒更霰語』をまとめた由来は、序文の一部に次のように記されている。

軒端ヲ過ル夜半ノ霰ニ驚サレテ、老ノ寝覚ノセン方ナキニ、埋火ノ炭ヲ添、燈ノ花ヲ剔（ケヅリ）テ、アタリナル文架ヲ探レバ、去年ノ秋物セシ『斥邪漫筆』、ハタ往シ春カキツギシ『〔斥邪〕二筆』ヲ得タリ。其比ハ閲（ケミ）スルトコロ破邪闢邪ノ諸書、『小学正宗』、『瀛環志略』、『六合叢談』原本等ニ過ズ。サレバ洋教・西教ノケヂメハ知トイヘドモ、其教ノ分ル、ムネヲ詳ニセズ。此頃、夷輩ノ聖書ト称ル『両約書』、ハタ咸豊ノ比、米夷丁韙良ガ著セル『天道溯原』等ヲ読ムコトヲ得、其餘見聞スルコトアリテ、今ノ天教、古ノ天教ニ畧異（ホボ）ナルムネヲ意得ス。然レドモ、至竟同源異流ト云ベク、帰スルトコロ天主ノ二字ニ過ズ。綱常ヲ壊（ヤブ）リ、心術ヲ害シ、人ノ国ヲ乱スコトハ、古今一般ナリ。サレバ『三筆』ノ腹稿已ニ成レ、


深慨隱士著
子虛陳人校
寒更霰語
斥邪三筆
紫瑞附刻
衛道書屋藏

寒更霰語序
軒端ヲ過ル夜半ノ霰ニ驚サレテ、老ノ寐覺ノセン方ナキニ、埋火ノ炭ヲ添燈ノ花ヲ剔テ、アタリナル文架ヲ探レハ、去年ノ秋物セシ、斥邪漫筆ハタ往シ春カキツキシ二筆ヲ得タリ、其比ハ、闘スルトコロ破邪闢邪ノ諸書、小學正宗、瀛環志畧、六合叢談原本等ニ過スサレハ、洋教西教ノケヂメハ知トイヘトモ、其教ノ分ル、ム子ヲ詳ニセス、此頃、寒輩ノ聖書ト称ル兩約書、ハタ咸豊ノ比、采夷灯遷浪カ著セル、天道溯原等ヲ讀コトヲ得其餘見聞スルコトアリ

『寒更霰語』（青山学院資料センター架蔵）

ド、尚彼書共ヲ渉猟（ミワタ）シテコソト思ヘバ、座右ニ空冊子ヲ置テ、見聞ニ随テ、且録シ且評シテ、巻ヲナシヌ。

右の文章の末尾には、「勿卒（カリソメ）ノシワザニテ、固ヨリタシカナル著述ニアラネバ、或ハ聞タガヘ思ヒガメタルモアルベシ。サレバ筆ヲ起シタル初ニ就テ、『寒更霰語』ト名ク。」とあり、本書は本格的な破邪書ではなく、『斥邪三筆』執筆の前段階における予備的な著作であることを示している。しかしながら、後述のごとく『斥邪三筆』は未完の書となってしまっただけに、『寒更霰語』の論説は、深慨隱士のキリスト教研究の成果を示すものとして注目すべきものであるといえる。

本書の刊行は慶応四年（一八六八）であり、上下二冊より成る。上冊の冒頭には、先憂子・子虛陳人による題辞（計一葉）と、校者憂国野叟の序（二葉）および深慨隱士の自序（二葉）があり、本文は上冊（二三葉）、下冊（二四葉）でまとめられている。なお下冊の末尾には、未完の書となってしまった『斥邪三筆』の初めの部分（五葉）が付載されている。

『寒更霰語』の内容についてまず注目すべきは、プロテスタントとカトリックの弁別に関するまとめである。深慨隱士は下冊の冒頭において、インスリー Inslee, Elias B.（応思理）[24] の

中国語著作である『聖教鑑略』[25]を長文にわたって引用しつつ、両者の特質を弁別することに努めている。若干の補記を加えつつその部分を掲示すれば次の如くである。〔下一―二葉〕

天主教（カトリック）の特色

1　人ノ土地ヲ奪ヒ、羅馬ノ天主教首（ローマ教皇）ニ与ヘ、管轄セシメント欲ス。
2　羅馬ノ天主教首ヲ以テ、耶蘇代理ノ人トス。
3　木ヲ以テ為ル所ノ十字架ヲ拝シ、且歴代聖賢ノ偶像（聖像）ヲ拝ス。
4　釈教（仏教）ノ如ク數珠ヲ用ユ。
5　耶蘇ノ教書ヲ分チ読マシメズ、又他ノ書ヲ分ツコトヲ阻ム。
6　聖書中十誡アリ。第二ニ云フ、「爾、偶像ヲ造リ、以テ事フルコト毋レ」ト。然ルニ彼、コレニ従ハズ。第十ヲ分チテ二誡トシ、仍十誡ノ数ヲ用ユ。
7　教ニ入ル者、礼拝日ニ於テモ、工ヲ興シ、業ヲ為スコトヲ許ス。
8　菴廟僧尼アルコト、釈教ノ如シ。
9　天主教首ヲ信ズレバ、能人ノ罪ヲ捨ストス。
10　己ガ与ニ難ヲ受ル者ハ、罪ヲ免ルベシトス。
11　人死シテ霊魂ハ地獄ノ半ニアリ、錢財ヲ以テ僧ニ帰レバ、遂ニ救ヲ得ベシトス。
12　教ヲ行フノ事ニハ、虚誘ヲ妨ゲズトス。

耶蘇教（プロテスタント）の特色

1　三位合一（三位一体）ノ真神ヲ拝ス。
2　人、皆罪アリ。惟、耶蘇ノミ贖ナフ可シ。

3　人死シテ、霊魂或ハ天堂ニ升(ノボ)リ、或ハ地獄ニ下ル。善悪ノ両途、生前マヅマサニ預備スベシ。

4　人、皆功勲ナシ、惟、耶蘇ニ頼ル。

5　聖書最要ナルヲ以テ、分チテコレヲ送リ、人ノ披読ニ任ス。〔下一―二葉〕

右のカトリック・プロテスタントの特色は、プロテスタント宣教師の中国語著作を通じてのまとめであるだけに、プロテスタントの立場によって書かれていることはいうまでもない。深慨隠士はこのことを認識しており、右のまとめのあと、次のように記している。

方今、欧羅巴ノ中、或ハ耶蘇教ノ国トシ、或ハ　天主教ノ国トス。彼ハ此ヲ以テ不正トシ、此ハ彼ヲ以テ不正トス。古ヨリ今ニ至ルマデ、諍論止ムコトナシ。〔下二葉〕

深慨隠士のキリスト教認識は、西洋キリスト教史における東西両教会の分離および、宗教改革によるプロテスタンティズムの成立にまで及んでいるが、これに関しても『聖教鑑略』を資料として活用している。宗教改革に関するまとめを以下に引用する。

此天主教トイヘル、所謂洋教ナリ。耶蘇教トイヘル、所謂西教ナリ。此二教、同じく天主ヲ奉ジ、同ジク耶蘇ヲ崇ブ、其特ニ耶蘇教ト称スル初ハ、今ヨリ五百年已前、英国為格里法(イカリハ)【ウイクリフ】トイフ者、旧天教者ノ非ヲ糾シ、耶蘇ノ正法ヲ弘ムト称シテ、天主教ニ別ナリト主張ス。其後百余年ヲ経テ、日耳曼人路得(リュテル)、為格里法ノ法ヲ承テ、大ニ耶蘇教ヲ弘ム。而シテ漸ク耶蘇教ニ変ズル者多クナル。故ニ天主教ト分ル、ハ、此路得ヨリ始マル。然レドモ同ジク天主ヲ奉ジ、同ジク耶蘇ヲ崇ブ中、新天教ハ、特ニ耶蘇ノ正意ヲ得ト称シテ、以テ教ノ名トセリ。此ノ如ク互ニ正邪ヲ爭フト雖、唯是同源異流ニシテ、共ニ邪教ノ域ヲ出デズト知ルベシ。〔下三―四葉〕

深慨隠士は右のように『聖教鑑略』をよりどころとして、キリスト教の歴史およびその分派について彼自身としての見解をまとめてはいるが、十分な推敲を加えるいとまもなかっただけに、他日、機会を得てより詳細な検討を行なうことを期してい

たようであり、そのことは、『聖教鑑略』引用文の末尾に、「猶、源流ノ次第ノ詳ナルコト、ハタ耶蘇教ノ濫觴ニ就テ論ズベキアレバ、他日『聖教鑑略評斥』ヲ述シテ、巻ヲナスベシ。」とある文章によって推察することができる。

『寒更霰語』の文中には、上記の『聖教鑑略』だけではなく、『旧・新約全書』[26]『天道溯原』[27]『小学正宗』『天道鏡要』[28]『六合叢談』[29]等、入華プロテスタント宣教師が刊行した中国語著作の書名が挙げられており、かれがこれらの書物の閲読を通して、主体的にプロテスタントの分析・批判を行なっていたことを示している。

以下に『旧約全書』および『天道溯原』に関する閲読のまとめと論評について引用してみることとする。

A『旧約全書』ノ首ニ、創世記、出埃及記、利未記、民数紀略、申命記ヲ列ス。……其創世記ハ、上帝太初ノ時、創テ天地万物ヲ造ルコトヲ記ス。初天地ヲ造ルニ、地虚曠晦冥ナリ。……上帝曰、宜ク光アルベシト。即光アリ、上帝、光ヲ視テ善トシ、遂ニ光暗ヲ判ジ、光ヲ謂テ晝トシ、暗ヲ謂テ夜トス。夕アリ朝アリ、是乃首日ナリ。(下略)〔上五―六葉〕

○評云。儒家ノ太古、神道ノ開闢、仏氏ノ成劫、世界ノ初ヲ説ク。簡略ニシテ迫切ナラズ。創世記ノ談ズル所、天主六日ニシテ天地万物ヲ造作ス。而モ其日々ノ造ルトコロ、井々トシテ次第アル、委細ニ過ギテ信ジ難シ。其首日、天地未分ノ時、地ノミ虚曠晦冥トイヘル、思ヒガタシ。若天ハ上ニアリ、地ハ下ニアリトイハバ、何ゾ二日ニ上下ノ水ヲ相隔ラシメ、遂ニ穹蒼ヲ作ストイフヤ。……今天主イカニ全智全能トイフトモ、一日ニシテ四時ヲ分チ年ヲ紀スルコト、イブカシ。仏氏成劫ノ初ヲ説クハ此ノ如クナラズ。(下略)〔上七葉〕

○夷輩、支那ノ典籍ヲ剽竊シテ、其教ヲ荘飾ス、旧約書創世記ニ、六日ノ間ニ天地万物ヲ造ル事ヲ述べ、其後挪亞(ノア)ノ三子、所謂三大洲ノ祖タル如キ、全ク『史記』を剽竊スルモノナリ。……夷輩、剽竊ヲ事トシ、僭シテ『聖経』『聖書』ト名ケ、ハタ各国ノ史乗ヲ作ルト雖、万口一辞ニシテ、唯天主耶蘇ヲ信ズルヲ帰トシ、禍福ヲ以テ準トスルニ過ギズ。正心誠意、忠孝節義ノ談ナケレバ、油然トシテ、感ズル所有リ、肅然トシテ懼ル所ヲ知ルノ地位ナシ。(下略)〔下四―六葉〕

B『天道溯原』三巻、合衆国丁韙良撰……此書モッパラ耶蘇教ヲ主張シ、天主ノ信ズベキコトヲ辨ゼリ。両約書及ビ此書ヲ

研究セバ、方今邪教ノ建立、宛モ掌ヲ指スガ如クナラン。

○評ニ云フ。夷輩逾々支那ノ書ヲ読テ其理ニ通ジ、其ノ言ハ不ル所ヲ唱テ、聖賢ノ説ヲ加減シ、仏法ノ糟粕ヲ掠メテ、天堂地獄ノ説ヲ主張シ、誇テ儒道ノ及バ不ル所ヲ助クトイヘリ。五行ノ中、木ハ餘ノ四ニ比スベキニ非ズトシテ、代ルニ風ヲ以テシ、五倫ノ上ニ神人倫ヲ加ヘテ、六倫トスルガ如キ、恣ニ儒教ヲ加減スルコトト知リヌベシ。……丁氏ノ文、雅健流暢、筆端鼓舞、儔(タグヒ)マレナリ。明末利瑪竇ノ『交友論』、王肯堂ノ刪潤ニ由ルニ例スレバ、唐氏ノ斧正ヲ経ルナルベシト雖モ、華夷ノ書伝ニ熟スルニ非ズンバ、此ノ如クナルニ至ラジ。而シテ巧ニ明末天教ノ短処ヲ避ケ、外人ノ忌諱ニ触レザルヤウニ筆シ、古ノ天教ニ異ニシテ、耶蘇ノ正義ヲ叙スルヨシ唱フルト雖モ、其中夸大ノ語アリ、誑惑ノ語アリ、妄誕無稽ノ語アリ。其大旨、先知ノ預言ヲ敍ベ、耶蘇ノ救世ヲ贊シ、至竟天主ノ信不信ヲ以テ、後生ノ升沈ヲ言フニ過ギズ。反覆シテ味ヘバ、今古ノ天教互ニ邪正ヲ争フモ、共ニ五十歩百歩ノ差ニシテ、倫理ヲ滅シ心術ヲ害シ、国家ヲ紛乱スルノ域ヲ出デズ。後学宜ク諒察スベシ。〔上三―五葉〕

プロテスタントがキリシタンとは異なる別派の教徒であり、邪教徒でないことを強調していることについては、既に『斥邪二筆』においても言及しているが（一八頁参照）、『寒更霰語』においても『小学正宗』を引用しつつ次のように論じている。

方今夷輩、務メテ天教・邪教ノ異ヲ説キ、古ノ天主教ハ邪法ニシテ、皇国ニ禁ゼラルヽハ其宜ナリ、吾亦彼ヲ邪トシテ用ヒ不。吾耶蘇教ハ、大ニ彼ト異ナリ、専ラ耶蘇ノ聖経ニ依リ、邪術ヲ用ヒズ、人ノ国ヲ奪フコトヲセズ。但五倫ノ上ニ神人倫ヲ立テ、天主ノ命ニ遵奉スレバ、五倫自ラ正シク、生テ天意ニカナヒ、死シテ天国ニ生ズ、事天修身全備ト謂フベシトイヘリ。然レドモ其異ナルモノハ支末ニシテ、根本ハ是同ジ。新旧同ジク崇ムル所ハ天主ニシテ、奉ズルモノハ耶蘇ナリ。故ニ近時夷人ノ著述、林ノ如シト雖、二子ノ違命、耶蘇ノ十字架ニ於テハ、筆セザル者ナシ。所謂「吾教之根本、惟、上帝耶蘇ヲ信ズルヲ宗ト為ス」（『小学正宗』）モノナリ。且耶蘇ヲ贊スルトコロ、タダ預言・神迹・贖罪ニ在リ。サラバ其本源タル、上帝耶和華ノ天地万物ヲ造ルトイフ妄ヲ難ジテ、其理塞ガルトキハ、預言ヲ以テ重ヲ取ル耶蘇ハ、随テ仆レ

ナン。此ノ如ク根本全同ナルトキハ、旧天教邪ナラバ新天教モ邪ナルコト、辨ヲ待タ不。何ゾ支末ノ異ヲ挙ゲテ、彼ハ邪、此ハ正トイフコトヲ得ン〔下七―八葉〕

プロテスタントとカトリックが大同小異の邪教徒であることを論ずる点において『寒更霰語』の論述は『斥邪二筆』よりも、より具体的なものとなっていることを見ることができる。

深慨隠士はまた、キリスト教蔓延の兆しのある幕末期において、破邪陣営の結束強化が必要であるにも拘らず、仏教・儒教・神道の協和が不十分であることを憂えて次のように述べている。

A方今夷輩、自ラ人ノ国ヲ奪ハズト称ス。イマダ其国ヲ奪ハズシテ、先国民ノ心ヲ奪フ。而して漸ク「風ヲ移シ、俗ヲ易フル」トキハ、山川城邑ハ依然タリトモ、己ニ夷ノ属タル者ナリ。彼ガ術、人心ヲシテ専ラ一天主ニ傾ケシメテ、死ヲ畏レズ、能ク本国ノ君上ニ敵ス。豈人ノ国ヲ奪フコトヲセズトイフベケンヤ。サレバ耶蘇ノ法、新旧ヲ論ゼズ、他国ヲ呑噬スルノ媒ナリ。サラバコレヲ禦グモ、本国ノ人心ヲ一ニシテ、其冦ヲ拒グベシ。其人心ヲ一ニセシムルハ、旧来其国ニ行ハルル教法ニ如クハナシ。故ニ明国万暦ノ末、邪教東来ノ比、儒仏ノ徒、力ヲ戮セテコレヲ禦ゲリ。支那ニ儒仏道ノ三教アリ。皇朝ニ神儒仏ノ三道アリ。協和シテ国ヲ衛ルベシ。〔下一〇葉〕

B而シテ和漢ニ亘リテ、称スルニ異端ヲ以テシテ仏ヲ拝スルハ、儒士ノ常ナリ。然ルニ皇国ノ昔、公卿士庶、概ネ少(ワカ)フシテハ儒、老イテハ仏、而モ能(ヨク)、天津日嗣ヲ戴キテ、優ニ豊葦原ノ光ヲ揚グ。近世国学者流、儒仏ヲ併セテ、異国ノ教トシ貶セリ。今日西洋ノ天教ハ、是真ノ異端邪法ニシテ、日月ヲ輕蔑シ、神仏ヲ毀辱シ、五倫ヲ加減シ、誘フニ利ヲ以テシテ、国民ノ心ヲ奪ハントス。儒・仏二教共ニ異国ノ道ナレドモ、東渡シテ能(ヨク)、皇国ヲ輔翼スルモノナリ。故ニ上宮太子、三道並興シタマヒシヨリ以来、歴代ノ朝廷、遵奉シテ今日ニ至ル。豈西洋ノ邪教、皇国ヲ窺窬シテ厳禁トナレル者ト、日ヲ同フシテ談ズベケンヤ。〔下一〇―一一葉〕

C目前夷輩、今古天教ノ同異ヲ口ニシ、官ニ請テ公行センコトヲ謀ルノ巷説アリ。実ニ眉ヲ燃クノ急ナリ。〔下一一葉〕

右の文中に便宜上付したＡＢＣの記号により、文意の大略をまとめてみれば次のようである。

Ａ幕末期に流入したキリスト教特にプロテスタントは、日本をキリスト教化することによって領土的侵略をも考えている。これに対抗するには明末の中国がカトリックの侵入に対し、儒教・仏教が協調して対抗したように、日本でも神道・儒教・仏教が協力しなければならない。

Ｂ右の状況であるにも拘らず、現時のわが国では三教の協調体制はとれていない。儒教・仏教は外来の宗教ではあるが、わが国に伝わって以来、歴代の朝廷の崇信を受けたものであり、邪教であるキリスト教とは全く異なるものである。

Ｃキリスト教公認の風説すらある現在、わが国は危急存亡の時にある。三教が協和して邪教に当る体制を構築することが必要である。

深慨隠士は右の文章のＢにおいて、幕末期における宗教界の実情を分析しており、このような状況では、キリスト教の蔓延を阻止することができないことを強調している。彼が『斥邪三筆』の執筆に先立ち、まず『寒更霰語』の刊行を決意したのは、破邪論の研究を進めると同時に、急遽、わが国の宗教界の低迷さに対する警鐘を鳴らすことにもあったと考えられる。

『寒更霰語』の本文のあとには、『斥邪三筆』の最初の部分が付載されている。これについて憂国野叟は次の文を末尾に記しており、その由来を知ることができる。（原漢文を書き下し文に改めた）

右、『斥邪三筆』、発端纔ニ就クモ、隠士下世ス。惜シイカナ夫ノ全篇ノ腹稿成ルト雖モ、未ダ筆硯ヲ役セザレバ、則チ後人、得テ知ル可カラズ。余謂フニ、此ハ小冊ト雖モ、作者心血ノ凝スル所ナリ。其ノ未ダ全カラザルヲ以テ、或ハ竟ニ湮滅スルハ、亦更ニ惜シム可キ乎。是ニ於テ校正シテ『寒更霰語』ノ後ニ附刻シ、以テ其ノ伝ヲ広クス。覽ル者、豹文ノ一斑ヲ窺ヘバ可ナリ。

戊辰莫春　　憂国野叟識

右に示されているように、『斥邪三筆』は深慨隠士の絶筆で未完の書ではあるが、『寒更霰語』に見られるキリスト教の調

査・研究をもとに想を新たにしてまとめたものであるということができる。

以下に『斥邪三筆』の冒頭の部分を引用する。

西洋ノ邪教ハ、本戎狄ノ陋習ニ起リテ、淺近愚昧ノ妄説ナリ。而シテ彼諸国コレヲ尊奉シ、通商ニ託シテ各国ノ形勢ヲ窺ヒ、弱キハ直ニ兵ヲ起シテコレヲ襲ヒ、強キハ先奇工新製ヲ以テ、民ノ耳目ヲ悦バシメ、或ハ幻術ヲ以テ奇怪ヲ衒(テラ)ヒ、医療ヲ以テ効験ヲ示シ、財利ヲ以テコレヲ啗(クラ)ハシメ、終ニ邪教ヲ以テ其国民ヲ誘惑シ、心ヲ己(オノレ)ニ傾ケシメ、其国君ニ叛カシムルニ至ル。サレバ邪教ハ、其新旧ヲ論ゼズ、他国ヲ呑噬スルノ媒ナリ。若其国民悉ク其説ヲ奉ズルニ至ラバ、国君アリト雖モ、誰ト共ニカ其国ヲ守ラン。……方今、通商マスマス盛ニシテ、夷輩力ヲ極メテ邪教ヲ神州ニ行ハントス。コレヲ禦グニハ、先本国ノ人心ヲ一ニシテ其誑惑ヲ防グベシ。其人心ヲ一ニスルハ、旧来行ハルル教道ニ如クハナシ。故ニ明国万暦末、邪教東来ノ頃、儒仏ノ徒、力ヲ戮セテコレヲ禦ゲリ。支那ニ儒仏道ノ三教アリ、皇国ニ神儒仏ノ三道アリ。協和シテ国家ヲ衛護スベシ。(下略)〔附一―二葉〕

『斥邪三筆』は深慨隠士の破邪論の集大成ともなるべき著作であったわけであり、たゆまざるキリスト教研究の成果をふまえ、想を新たにして起稿した本書が未完の書となってしまったのは、誠に惜しまれることである。

結　語

本稿は幕末期における破邪僧として著明な深慨隠士の著作である『斥邪漫筆』『斥邪二筆』『寒更霰語』および未完の書である『斥邪三筆』を通して、開国後におけるキリスト教の蔓延を憂えていた著者の危機感と対抗策について考察したものである。(30)

深慨隠士は初期の著作である『斥邪漫筆』『斥邪二筆』執筆の時期においては、『破邪集』や『闢邪管見録』等に依拠して識ることのできた明末破邪論を継承することが中心であった。しかしこの段階においても、すでに開国後わが国において盛んな

伝道を開始していたプロテスタントに対して強い警戒感を持っており、西洋のキリスト教についてより正確な認識を持つことの必要性を痛感していた。彼が『聖教鑑略』等の入華プロテスタント宣教師の中国語著作をもとに、西洋におけるキリスト教の歴史や、カトリックとプロテスタントの弁別等に努力したのはこの為であり、一方、護教の立場から、これらの中国語著作に対する批判を展開している。そしてこれらの諸活動を通して、なるべく早く『斥邪二筆』の続編である『斥邪三筆』をまとめる予定であったが、これには若干の時間的余裕が必要であった。彼が『斥邪三筆』刊行の前段階においてまず『寒更霰語』を刊行したのは、このような状況においてであり、研究の成果を中間的にまとめていくと同時に、危機であるにも拘わらずキリスト教の進出に対抗して協調的対策を案出することができなかったわが国の宗教界に対し、警鐘を鳴らす意図もあったと推察することができる。

深慨隠士の急逝により『斥邪三筆』が未完の書となってしまっただけに、『寒更霰語』は彼の精力的な破邪活動における、最終的な努力の結晶となってしまったものであり、特異な形式の破邪書ではあるが、極めて注目すべきものとみることができる。

註

(1) 深慨隠士については『斥邪漫筆』他の解題において松崎実氏が考証されており、釈超然であろうと推定されている。(『明治文化全集　思想篇』日本評論社　一九二九)
なお『明治文化全集　思想篇』には、『斥邪漫筆』『斥邪二筆』および『寒更霰語』が活字版で収録されている。

(2) 吉野作造氏は、「維新前後の邪蘇教観」(『新井白石とヨワン・シローテ』文化生活研究会　一九二四　所収)において、『寒更霰語』の内容を批判的に検討されている。本稿は右の研究に多大な教示を受けつつまとめたものである。

(3) 『破邪集』は水戸藩主徳川斉昭が、キリスト教の破斥をめざし、明の徐昌治が編纂した『聖朝破邪集』全八巻を翻刻したものである。中国の排耶論の集成ともいうべき同書の翻刻は、キリスト教の弊害についての情報を普及させることになり、幕末期排耶論の形成に大きく貢献した。

(4) 杞憂道人は浄土宗の僧養鷗徹定の別号である。道人は明治初年において仏教興隆に努力し、明治五年(一八七二)浄土宗管長に就

任した。排耶論の論客としても著名であり、『闢邪管見録』『翻刻闢邪集』『破提宇子』を翻刻し、『釈教正謬初破』『笑耶論』『釈教正謬再破』を著述している。

(5) 『闢邪管見録』は、杞憂道人が江戸時代初期以来の排耶論に関する文献を集成して翻刻したもので、文久二年（一八六二）刊行された。全二巻より成る。

(6) 『翻刻闢邪集』は、杞憂道人が明末の排耶書の若干を翻刻したもので、文久元年（一八六一）刊行された。全二巻より成る。(3)の『破邪集』と重複する文献もある。

(7) コボルドはイギリスのChurch of England Missionary所属の宣教師で、一八四八年より五七年にかけて、上海・寧波を中心に伝道し、この間一〇種の中国語著作を刊行した。

(8) 『小学正宗』は、コボルドが一八五六年上海で刊行した三〇葉の中国語著作であり、小引のあと、質疑応答形式でキリスト教の教義についての解説が展開している。

(9)(10)(11) マッカーティーの伝道活動および彼の中国語著作については、左記拙稿において考察した。
「入華宣教師マッカーティーと中国語布教書」立正大学文学部論叢九四　一九九一

(12) マテオ・リッチは一五七一年イエズス会に入会し、一五八三年広東省に入り、以後各地で伝道すると共に、西洋の科学的知識を伝えて中国知識人の尊敬を受けた。一六〇一年北京で神宗皇帝に謁見を許され、やがて北京城内に教会を建設した。彼の努力により、徐光啓・李之藻等の中国高官がキリスト教に入信したことは、中国キリスト教伝道史上重要である。

(13) アレニは一六〇〇年イエズス会に入会し、一六一〇年マカオに着、一三年北京に入り、以後各地で伝道した。中国人より「西方から来た孔子」の敬称を受けており、中国語著作としては『西学凡』『職方外紀』等が著名である。

(14)(15)(16) ミュアーヘッドの伝道活動および彼の中国語著作である『地理全志』『大英国志』については、左記拙稿において考察した。
「入華プロテスタント宣教師の海外事情紹介」歴史人類（筑波大学）一四　一九八六

(17)(18) エドキンスの伝道活動および彼の中国語著作である『釈教正謬』については、左記拙稿において考察した。
「中国語キリスト教書の流入と仏教界の対応—幕末明治初年を中心として—」仏教史学　三二—一　一九八九

(19) 清の官僚で地理学者であり、一九三六年御史に任ぜられ、以後各地の知府・道台・按察使や、布政使・巡撫等を歴任している。福建に在任中、入華宣教師アビールAbeel, David（雅裨理）から借用した地図がきっかけとなって世界地図の収集および海外事情の摂取に興味を持ち、やがて『瀛環志略』一〇巻を刊行するにいたった。

(20) 徐継畬がまとめた世界地理書であり、全一〇巻より成る。内容は巻一—三（地球総論、アジア各国）、巻四—七（ヨーロッパ各国）、

巻八－一〇（アフリカ各国　南北アメリカ各国）の計一〇巻より構成されている。一八四八年に刊行され、魏源の『海国図誌』と共に、海外事情を認識するための啓蒙的地理書として広く流布した。また幕末期のわが国に流入し、和刻版も作成された。

(21) 富樫默惠は浄土真宗の僧侶であり、安政三年（一八五六）擬講となり、慶応元年（一八六五）には嗣講となっている。数冊の著述があるが、『内外二憂録』の他は刊行されなかった。明治一〇年（一八七七）寂。

(22) 富樫默惠が慶応三年（一八六五）講述した破邪論を、著者の寂後、甥の佐々木義祥が明治一六年（一八八三）に刊行したもの。内題に「破邪編」「内外二憂録　上」とあり、内憂・外憂の両者を論述する意向であったと推察される。

(23) 『明治仏教全集　第八巻　護法篇』春陽堂　一九三五　三四一頁

(24) インスリーはアメリカ長老教会の入華宣教師であり、一八五六年上海に到着後、一八六六年に帰米するまで各地で伝道した。中国語著作として、『聖山諧歌』（讃美歌集）・『聖教鑑略』がある。また彼が編集した中国語定期刊行誌である『中外新報』は、幕末期のわが国に流入し、文久年間には官板として刊行され、初期の翻刻新聞として著名である。

(25) インスリーが一八六〇年寧波で刊行した中国語著作である。計三八章より成り、プロテスタントの立場でキリスト教について解説し、また中国の伝統的宗教および太平天国のキリスト教についても論述している。

(26) 『寒更霰語』巻上の冒頭の部分に、深慨隠士は、上海墨海書館刊行の『新約全書』（一八五五年版）および『旧約全書』（一八五八年版）を閲読したことを記している。

(27) 『天道溯原』については、左記拙著において考察した。
『中国キリスト教伝道文書の研究－『天道溯原』の研究・附訳注－』汲古書院　一九九三

(28) 『天道鏡要』は、マルティンMartin, S. N. D.（孟丁元）が一八五八年寧波で刊行した中国語著作であり、九七葉より成る。内容の構成は三巻に分れ、第一巻は旧約の歴史、第二巻はイエスの生涯、第三巻はキリスト教の教義について解説している。

(29) 『六合叢談』については、左記拙稿において考察した。
「宣教師刊中国語定期刊行誌の中国版と日本版－『六合叢談』の資料的考察」立正史学　八二　一九九七

(30) 坂口満宏氏は、「幕末維新期の排耶論」（『近代日本社会とキリスト教』同朋社　一九八九所収）において、幕末・維新期に著述された一一種の排耶書を、中国排耶論の援用とそれからの離脱という視角で解析されている。本稿は右の視角を参照させていただきつつ、深慨隠士の三著を分析的に考察したものである。

後記　本稿の作成にあたり、青山学院資料センターより、架蔵書を利用させていただいたことに対し、厚く御礼を申し上げます。